

修羅の痴漢道



緒莉

声優 水島多也 / 深沢正
脚本 玄野トモアキ

修羅の痴漢道



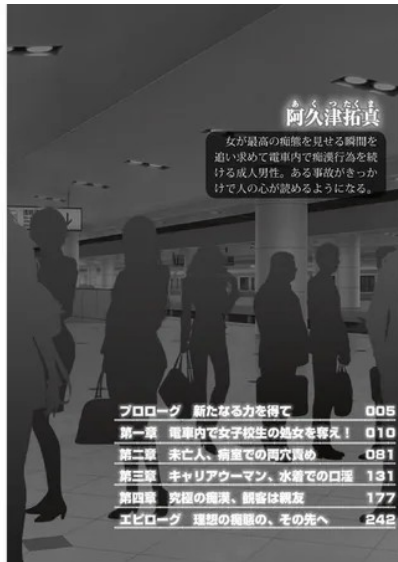
著：緒莉

画：水島☆多也 / 玄野トモアキ
深泥正
原作：BISHOP

CB オトナ文庫



プロローグ 新たなる力を得て



阿久津拓真
 女が最高の痴態を見せる瞬間を
 追い求めて電車で痴漢行為を続
 ける成人男性。ある事故がきっか
 けて人の心が読めるようになる。

プロローグ 新たなる力を得て	006
第一章 電車で女子校生の痴女を奪え!	010
第二章 未亡人、箱車での悶穴責め	081
第三章 キャリアウーマン、水道での口淫	131
第四章 究極の痴漢、顧客は親友	177
エピローグ 理想の痴漢の、その先へ	242

午後七時、電車は、仕事帰りのサラリーマンやOJで混み合っている。満身に汗をかき取れないような蒸籠っぶりな、くたひれ大衆をしている彼らにとってはいつもと変わらない日常で、それは阿久津拓真にとっても同じだった。ただ彼は、常人ながら身動きすることも難しい車内を、さして何も無く動き回ることができる。そう、電車の中は、凄腕の痴漢である拓真のフィールドだった。

「んむっ……ひゅっ……」

拓真は後ろから抱き付くようにして、朝服姿の女の乳房を触さぶっている。ボリュームと弾力のある、極上の乳房だった。

「このっ、やめなさいっ……! うっ……手を離してっ!」

肩を吊り上げて拓真を覗み付けてきた、気の強そうなショートカットの女の名前は、前川由宇。鉄道警備員で、この電車が走る路線全般を監視・警戒し、日々痴漢や犯罪の抑止、防止に努めている女だ。拓真は以前、そうとは知らずオフで私服を着ていた由宇に痴漢をしてイカせたことがあり、今日は彼女に対する二度目の痴漢だった。

登場人物

相模原 雪穂
 のんびりとしていて、優しく穏やかな雰囲気。2年前に夫が交通事故で亡くなり、未亡人となっている。男性人気も高いが、再婚は考えていない。

久利橋 小春
 礼儀正しい女子学生。認知度がささいな女子が得意で、甘い味から敬愛が得意で、学生時代に足を蒸かしている。近頃、母の再婚は文学部の太学へ進学を志している。

星宮 華音
 総合病院の理事長を父に持ち、オチオチルに他人を見下すのが大好き。父親の命令で、一般的な生活を知るために学園へは電車を使って通学している。

常磐 桐香
 製菓会社で営業のMRに就任。実力主義なチームリーダー。愛想はないが、理路整然としたプロフェッショナルな態度で営業成績はトップクラス。

最近のことだった。今の拓真には、由宇の心の声がクリアに聞こえている。能力を得てから初めてこの船で、拓真はこれまで経験したことのないほどの充実感を見えていた。どこまでか触れたら由宇がどう感じるのか、手に取るようにわかる。他人の心を読む力……船漢と使えらると思っていたが、こうも女をたやすく狂わせられるとは、予想以上だ。凄然と感じていた、船漢としての大きな壁のようなものを越えた実感があった。これなら、夢を叶えられるかもしれない。船漢して女の「理想の船態」を見ると、大きいなる夢を――



「ほら……こんなふうには満遍なく触つてやると、胸全体にいい感じ広がるだろう？」
 「感じないって、言ってるでしょ……くうんっ！ あうっ……やめ、なさいよあつ！」
 「なんで……無視しようって思えば思うほど、余計……なんでもなるのよあつ……」
 それは由宇の弱い責めを、拓真はほぼ正確に把握することができた。由宇がどんなに鉄道警備員として意識が高かろうと、圧倒的に自分が悪者だ。
 「どんなに否定しても、身体は正直だ……エロい声が出てきてるぞ」
 「ひっ……田、やめて、スカートまくつちやダメえっ……」
 意外に可愛らしい下着の中に手を差し入れると、ぬちやりとした粘着質の液体が指にまとわり付いてきた。
 「くうっ……またこんな……絶対捕まえてやるって思ってたのに、これじゃああの日と変わらないじゃないやないっ……恥ずかしくて、悔しくて、忘れられないあの日と……」
 「恥ずかしい記憶を掘り起こされてつかいか？ それなら何も考えられなくてやるよ、あの日お前をイかせた、この指でな……」
 「ひっ、あうっ！ だめ、クリ擦られたら、またイカされちゃうっ……」
 淫器に指を食い込ませた瞬間、由宇は心の中で目と口を歪んだ悲鳴を上げた。
 察しがいいなどという言葉では片付けられないほどの認心力を拓真が得たのは、つい

鉄道警備員が船漢にイカされる……それは由宇にとって耐えがたい屈辱だったことだろう。おかげで最初の船漢以降完全に目の敵にされてしまい、しつこく追い回されてきたのだが、そんな女を指ひこうして快感に溺れさせてやれると思えば、しつこく追い回されてきたの「嫌そう」しているわりには抵抗が薄いな。揉まれてさっさと気持ちよくなっているんじゃないか？
 「そんなわけ、ないでしょ！ 手を離せて言ってるの……」
 「言葉や表情は強気だが、由宇の内心は激しく動揺している」
 「んん……胸いじられると、力抜けるっ……」
 「こんなやつ、すぐ捻られてやれるはずなのに……くうっ……なんでもこんな……」
 由宇の考ええていることが、拓真には手に取るようにわかる。
 「身体がずいぶん熱くなってきたな、船漢とれて興奮してきたか」
 「ひっっ、んっ！ 変態っ！ 船漢されて、感じるなんて……そんな男にとって都合のいい妄想を女に押し付けるなあつ……」
 「(いつにいいように船漢されて感じるなんて、絶対ダメえ……！) こんな、揉まぶられたって、平常心を保つていられ気にならないはずよ……」
 激しく感傷しているようだが、必死で快感を否定しようとしている時点ですでに、身体は快感を認めているということだ。